# 佳作

角田高等学校　2年　大内　絢加

表題「「僕が使者です。」」

書籍名『ツナグ』

振り返った彼が、面倒くさそうに目を細めてこっちを見た。

使う者と書いて「ツナグ」と言う。使者は死んだ人間と生きた人間を会わせることができる窓口。この窓口は、一生に一度だけ使うことができる。会えるのは、月が出ている間の夜だけ。この使者の前に現れたのが、それぞれの想いを抱えた四人。突然亡くなった好きなアイドルが心の支えだったＯＬ、年老いた母に癌を告知出来なかった頑固な息子、親友に抱いた嫉妬心に苛まれる女子高生、失踪した婚約者を七年間待ち続ける会社員。みんな、一人ひとり大事な人に伝えることができなかった自分の想いや感謝の気持ちをやっとの思いで伝えることが出来、読んでいる人の心の隅々まで染み入る感動の物語でした。

私がこの本を読み終えた時、頭に浮かんだ人がいます。それは、私の大好きな曾祖父母です。小さい頃には一緒にご飯を食べ、一緒にお散歩に行き、沢山遊んでくれた私の自慢の二人です。しかし、曾祖父は私が幼い頃亡くなり、毎日のように泣いていたのを今でも覚えています。

そして今年、曾祖母が先に逝ってしまった曾祖父の元へ逝ってしまいました。その日、私は朝から頭痛があり、亡くなった時間帯には頭痛が無くなっていたのです。きっと、曾祖母は私に何か伝えたかったのでしょう。私は、二人に自分の気持ちを目を見て伝えられなかった。「ありがとう」を言えなかった。使者の窓口を使って会いたい。でも、どう頑張っても現実はそう上手くいきません。

私は「ツナグ」を読み、日頃から感謝の気持ちや想いを相手に伝えるのがとても大事な事だとあらためて気付かされました。これから、この後悔をもう二度としないよう生きていこうと決めました。